

---

# 義姉ちゃんと俺と

出下夕御

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義姉ちゃんと俺と

### 【Nコード】

N2240P

### 【作者名】

出下夕御

### 【あらすじ】

前作【幼なじみと俺と】の様に、【彼女と俺とシリーズ】第二弾。今度は義<sup>き</sup>姉です。

義理のお姉ちゃんです。

下手くそです。

でも、見てください。

俺、飛鳥<sup>あすか</sup> 真<sup>しん</sup>はしがない高校二年生。俺の住む街は都市部に当たる。窓を開ければ、昼間ゴミゴミした街は夜になると、とても綺麗だ。そういうところで俺は存在している。

家族は俺と血の綱がつて無い義姉ちゃんとの二人暮らし。義姉ちゃんは俺と同じ高校の三年。しかも生徒会長で文武両道で顔も可愛いから一日一回は下駄箱の中は義姉ちゃん宛てのラブレターで一杯だ。そう、義姉ちゃんはそのくらいモテる。

義姉ちゃんの名は鷹田<sup>たかだ</sup> 流奈<sup>るな</sup>。義姉ちゃんは極度のブラコンで、俺はしょっちゅう被害に遭っている。

今日は日曜日で休みだ。今日も義姉ちゃんに振り回されるだろうけど。

「真ちゃん起きな」

「ううん……あと5分」

「だあめ！」

そういつて俺の布団を取っ払う。

「義姉ちゃん寒い！！」

「寒いのは冬だからでしょ？」

腕組みをしつつも、俺を見る義姉ちゃんの顔はすでにヤバい。

元々義姉ちゃんと俺との関係は、俺のお袋が亡くなってしまい、そのあと親父が今の義姉ちゃんのお袋さんと付き合い結婚したが、数年前に二人とも病死してしまった。その時の俺はまだ中学三年だ

ったから、受験の悪影響ともなってしまった。もしその時義姉ちゃんが支えてくれなかったら、普通に高校には通えなかったと思う。色んな意味で、義姉ちゃんには感謝している。

「まだ眠たいの？」

義姉ちゃんが持っていた俺の布団を取り、俺は不機嫌さを交えて話す。

「とーぜんだろ？昨日は昨日で色々疲れたんだぜ？まず近所のじっちゃんや腰を打っただろ、次にヒタクリに出くわして、その次は交通事故になりかけ、ついには帰りのバスに乗り遅れる始末」

「我が義弟おとうとながら不幸なのね」

「それに比べて、義姉ちゃんは登校すればラブレターの海に遭われ」

「私ってモテるから」

「生徒会の役員会とかでも人気が高いだけでなく、親衛隊やらファシクラブやら創設出来て」

「でも皆優しいよ？」

「俺が義弟なだけで差別されたり、羨まされるし」

「へえ」

「だからもう、色んな意味で疲れたからまだ寝かせてくれよ。頼むから」

すると義姉ちゃんは腕を組み何やら考え込んだあと、手を叩き、何やら閃いた様子で笑っていた。

「じゃあおねーちゃんも入れて入れて!!」

「ヤダ」

キツパリと反論したが、もう義姉ちゃんは体の半分を俺のベッドの布団の中に入り込んでいた。

「お邪魔し……」

「俺の部屋からでてけ!!!」

俺は布団から出ると、義姉ちゃんを部屋から出した。ドアの向こうから「ケチ!」と、義姉ちゃんの声が聞こえてくる。

俺は無視して、パジャマから私服に着替えてケータイの電源を入れ、部屋を出た。

一階のリビングに下りれば、少し不機嫌な義姉ちゃんが朝食を作っていた。

「そんなに一緒に寝たかったのか?」

「まあ、半分半分かな?」

「曖昧すぎんだろ!!」

「別にいいじゃん」

「つてか、納豆出せつて昨日言つたる?!」

「だって納豆嫌いなんだもん」

「飯にも姉貴なんだからよ、好き嫌いはどうなんだよ!」

しばらく口論(?)みたいな事を続けつつも朝食を食した俺ら二人。このあと、普通に義姉ちゃんが洗うのだが、洗濯等の洗い物は俺担当なのだ。それ故に、義姉ちゃんの下着はもう慣れた。

ここ最近俺は思う。義姉ちゃんは胸はちっちゃい方なのに、何故あんなにも人気があるんだ?分からん。

フト、俺のケータイがなる。画面を確認すると、あいつからだつた。

「はい」

『ヤッホー 真君元気してたー?』

電話の相手は幼なじみ菜月<sup>なつき</sup> 主刹<sup>すてし</sup>。一つ年下で義姉ちゃんとは旧知の仲らしい。

「主刹ちゃん、何の用?」

『御姐様をお呼びなさい!!』

「あゝ………… 義姉ちゃんならもう家出て、今頃何してるか…………」

事実、俺の義姉ちゃんは放浪癖(軽い意味で)がある。でもしっかりと帰宅はしている。

それで、主刹ちゃんは義姉ちゃんにめっちゃぞつこんで、百合疑

惑が浮上している。ま、俺は気にはしないが。

『じゃ、また連絡するね』

なんでだろう。微かに怒りさえ感じる。

数分後、義姉ちゃんは帰宅してきた。どうやらただの散歩らしい。

「むはーッ」

「ぐえッ！」

義姉ちゃんのもうひとつの必殺技の【胸元ダイブ】は俺限定の技らしく、未だ俺以外の被害者は出ていない。それが今、俺に当たった。

「義姉ちゃん！何すんだよ！！」

義姉ちゃんは答える。

「可愛い義弟を可愛がってるんだよ？感謝しなさい」

そういつて、倒れた俺の腰の上で馬乗りの状態で、無い胸を張って言った。そんな感じだから、初対面の人から幼く見られるのだ。例外もあるが。

かなり話もズレたが、まあいいか。

「まあ、そんな義姉ちゃんが好きなんだなこれが」

「ん？なんか言った？」

「さあ…」

その後、俺は始めて義姉ちゃんを後ろから抱いたのは、言うまでもない。

完



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2240p/>

---

義姉ちゃんと俺と

2010年12月10日16時31分発行